職員向け手話講座を開催

手話言語条例制定の主旨　まずは役場から

役場職員研修「手話講座」が11月21日開かれ、さまざまな課の課長から主事まで約30人が熱心に耳を傾けました。講師はＮＰＯ法人ウテカンパの吉原和香奈さん（ろう者）、田村直美さん（通訳）。

吉原さんは体験談を交え「聞こえない人もいるかもというのを常に頭において生活してもらいたい。聞こえないことは周りの人からは気づいてもらいにくい障がいで、視覚の情報が必要です。何よりろう者に分かりやすいことは他の人にとっても分かりやすい」と話し、「手話は目で見る『言葉』」であることを説明。「手話をもっと身近に」と望んでいました。参加者の一人は「ろう者の方の困難な部分など接し方を少し知ることができました」と感想を話していました。

町は令和５年７月に「白老町手話言語条例」を制定したことから、町内の小中学校をはじめ、町民や企業など広く理解を求めていく予定です。

月に１、２回、社台にあるコミュニティカフェ「ミナパチセ」（☎080－1874－3624）で手話講座（P24参照）も行っています。興味のある方は足を運んでみてください。（広報編集室）

地域おこし協力隊８人が報告会

白老に移住し、まちの活性化を目指す日々の奮闘や今後の取り組みを発表

鄭延雪さん（食と観光振興担当）、野田和規さん（森林ガイド担当）、乾藍那さん（アイヌ文化振興担当）、安田裕太郎さん（観光振興担当）、高島勇揮さん（同）、羽地夕夏さん（同）、山岸奈津子さん（文化芸術担当）、小箱駿太さん（スポーツ振興担当）。

町民や町職員ら約30人が参加。８人はＳＮＳによる白老の観光情報の発信やＩＴスキルの発揮、大規模なイベントの開催、ポロトの森のガイドと魅力発掘、アイヌ文化の伝承活動サポート、本屋やイベントスペースの整備、芸術活動支援からまちづくり法人の設立、子どもたちがスポーツに親しめる環境づくりなど、これまでの活動実績を今後乗り越えなければならない壁とともに報告しました。参加町民からは「やりたいことがどんどんでてくるのが素晴らしいね」などと声が上がっていました。大塩英男町長は一人ひとりに質問し「少しでも活動を知っていただけたでしょうか。これからもこの８人をよろしくお願いします」と総括していました。（11月30日）

地域おこし協力隊通信

鄭延雪さん（35）
食と観光振興担当（４年目）

２０１９年12月の着任後からコロナウイルス感染症が流行し、観光客の足が遠のく中、始めたのが白老町のさまざまな情報のＳＮＳでの発信です。反響は大きく結構な数の観光客が訪れてくれるようになりました。

また、インバウンド向けモニターツアーの開催や町内イベントへの出店などに取り組みました。私が企画した地域活性化イベント「戦チャンバラ合戦」は、道内を中心に約１２０人の参加があり、いい思い出をつくっていただきました。

まちおこし企画の試験的プロジェクト「ウエちゃん計画」。白老牛など特産品をモチーフにした観光誘導キャラクター「ウェちゃん」を考案し、このゆるキャラを軸に、事業を展開しています。

観光の原点は旅行者も町民にも「喜んでもらう」こと

これら企画の実現は、うまくいく時もいかない時もありましたが、職場の皆さんの絶え間ないサポートとさまざまな支援は、非常に貴重なものでした。白老で得た人は一生の宝です。

私は国道36号が好きで、お店や景色が最高です！もし、レンタサイクルをもっと工夫して自転車レーンを整備できれば、白老町を周遊する観光客も増えるし、週末に一緒に自転車に乗って自然を体験する親子も増えるなど、みんなが喜ぶと思います。それが観光の原点でしょう。

協力隊卒業後は３人家族で白老に在住し、「人と自然の共存」という理想の姿を感じとる旅が白老でできることを、世界に発信していこうと思っています。